2018年度 芦屋ユネスコ協会
「平和の鐘を鳴らそう！」行事開催

本年も、73年目の終戦記念日に当たる8月15日(水)、芦屋ユネスコ協会が主催、芦屋市・芦屋市教育委員会が共催して、「平和の鐘を鳴らそう」行事を盛大に実施しました。

第1部では、芦屋市民センター玄関横に設置された「優愛の鐘」を、佐藤副市長をはじめ、芦屋ユネスコ協会会員やその家族、また市民など約50人の皆さんが集い、『平和の祈りと願い』を込めた行事を実施しました。

佐藤副市長のご挨拶の後、参会者全員でユネスコの「平和宣言」を唱和し、正午のサイレンとともに黙祷、その後それぞれの思いを込め「優愛の鐘」を高らかに鳴らし、平和への誓いを新たにしました。

8月16日(木)　朝日新聞

終戦の日　すいとん　戦時中思い

平和祈る 鐘の音

芦屋

終戦の日の15日、芦屋市業平町の市民センターでは、戦争の記憶を語り継ごうと、芦屋ユネスコ協会の呼びかけで、平和を願う集いが開かれた。

戦時中に食べた、すいとんやふかし芋を味わう参加者

平和への願いを込めて「優愛の鐘」を鳴らす参加者＝いずれも芦屋市業平町

市民ら約50人が正午のサイレンを合図に黙禱。塩井努会長が「平和への願いを確認し、志を高く掲げたい」とあいさつし、一人ずつ敷地内の「優愛の鐘」を鳴らして平和を祈った。

戦時中の学童疎開を振り返るビデオを鑑賞し、当時、食べていたサツマイモのつるや、すいとん、ふかし芋を味わった。

祖父と母、姉の4人で来た芦屋市松ノ内町の小学4年生、由里柚葉さん(10)は「お母さんと離れて暮らすのはいやだなと思う。人が殺し合う戦争が、なくなってよかった」と話した。

(篠塚寿)

「平和の鐘を鳴らそう！」行事 2018　－第２部－

第２部では、精道国民学校学童 223 人、宮川国民学校学童 207 人が、岡山県（現・高梁市）に学童疎開した時の記録ＤＶＤ「集団疎開」を観賞。続いて、市民の皆さんによる「語り継ごう『私たちの戦争・戦後体験』」では、兵庫県文化の父と称され、亡くなるまで芦屋に住まれた詩人・富田砕花さんが死の直前までの 20 数年間、被爆者への募金を続けていたというエピソードや、市内在住の被爆者２世でもある千葉孝子さんからご自身の被爆体験など、貴重な体験談が語られました。

また今回は、芦屋ユ協の理事の皆さんや公民館グループのご協力ですいとんや芋蔓・ふかし芋・おにぎりなどが提供されましたが、参加された皆さんは戦後の人々の暮らしに思いを馳せながら提供された食べ物を食べつつ、貴重なお話に熱心に耳を傾けていました。

尊い平和 心に刻む

終戦記念日 各地で行事

2018年(平成30年)8月16日（木曜日）

讀賣新聞

芦屋市民センター（業平町）では芦屋ユネスコ協会と市、市教委が追悼行事を開催。参加者約50人が黙とうし、平和を願う「優愛の鐘」を鳴らした。その後、記録映像の鑑賞や戦時中の体験を聞きながら、すいとんやふかしイモを食べた。

中2の時から軍需工場で働き、15歳で終戦を迎えた由里正雄さん(88)(春日町)は「ふかしイモは食べられたらいい方で、すいとんもこんなにおいしくはなかった。食べる物も着る物もなかった」と振り返り、「戦争の悲惨さを知るからこそ、平和のありがたみがわかる」としみじみ語った。

宝塚市中央公民館（末広町）であった「終戦記念日のつどい」には、市民ら約200人が参加。悲惨な戦争は二度としないことを誓った。

まず、中川智子市長が「あの大戦で多くの人たちが未来を奪われ、大切な家族を思いながら無念の死を遂げた。平和は自分たちの言葉で、動きでしっかりと作り出していかなければならない」とあいさつ。

今年春に修学旅行で沖縄を訪れた市立宝塚中3年の女子生徒が「本当に平和な世界を作るためにも、沖縄の地上戦のことを忘れず、犠牲になった命をエネルギーに変えて後世に伝えることが一番大切」と話すなど、4人が平和のメッセージを述べた。

2018年(平成30年)8月16日　木曜日　神戸新聞

平和祈り鐘鳴らす

芦屋で戦争の記憶語り継ぐイベント

終戦の日の15日、戦争の記憶を語り継ぎ、平和について考えるイベント「平和の鐘を鳴らそう！」が、芦屋市業平町の同市民センターであった。参加者約50人が同センター前の鐘を鳴らした後、戦時中の食事を食べながら体験者らの言葉に耳を傾けた。

（斉藤絵美）

親子三世代で参加した由里さん一家。ふかし芋などの戦時食を食べた＝いずれも芦屋市業平町

戦時中の食事体験も

はんしん・戦後73年

芦屋ユネスコ協会や同市などが毎年、終戦の日に合わせて開催している。

参加者は正午のサイレンに合わせて黙とうし、同センター玄関前の「優愛の鐘」を順々に打ち鳴らした。

その後、学童疎開を取り上げた映像を観賞。有志が作った「すいとん」やふかし芋などを食べながら、当時の体験を語り合った。

芦屋市春日町の由里正雄さん(88)は疎開先で終戦を迎えた。「元の生活に戻れる。もう戦争に行かなくていいと喜んだ」と振り返り、「戦争の惨禍を知ってほしい。知らないと平和のありがたさが分からない」と話した。

一緒に参加した由里さんの孫で、同市立山手小学校4年の柚葉さん(10)は「お母さんと離れるのは嫌なのに、学童疎開した子どもは強いなと思う。戦争は想像もできないけれど怖いし嫌だ」と話した。

平和を祈り、鐘を鳴らす参加者たち

第２部の最後のプログラム「みんなで『平和のうたを歌いましょう』」では、ピアニストの金澤理事による演奏で、声楽家の加藤理事が「みかんの花咲く丘」やカタロニア民謡「鳥の歌」を歌唱指導くださり、例年のように浅田事務局長の指導による手話歌「ともだち讃歌」（アメリカ民謡）を参加者全員で歌いました。

年々参加者の年齢も高くなり、また年々減少傾向にもありますが、今後は平和への誓いを語り継ぐべき次世代の子どもたちの参加推進に取り組み、参加者数の増強にも一層努めていきたいと思いました。

「平和の鐘を鳴らそう！」行事

終戦73年

平成最後の「終戦の日」を迎えた15日、県内各地でも追悼式や関連行事があり、遺族や市民らが戦没者に祈りをささげた。悲惨な記憶が遠のく中、戦争を体験した人は「後世にしっかり受け継ぐ」とたゆまぬ努力を決意し、若い世代も平和な世界を強く願った。

平成３０年（2018年）８月１６日　木曜日

産経新聞

ふかし芋・すいとん　戦時中の食事体験

芦屋

芦屋市民センターでは、鐘を鳴らして平和を祈る催しが行われた。市民ら約50人が参加し、戦時中の食事も体験した＝写真。

芦屋ユネスコ協会などが平成25年から毎年実施。参加者は正午のサイレンに合わせて黙禱し、センター前にある「優愛の鐘」を鳴らして平和を願った。

その後、参加者はセンター内に移動。戦時中の食事を再現した「ふかし芋」や野菜ばかりの「すいとん」などを食べながら、市立精道小学校の児童が岡山県に集団疎開した際のドキュメンタリー映像を観賞するなどした。

京都で終戦を迎えたという芦屋市の主婦、青山睦子さん(81)は「終戦の日を迎えると、空襲警報の音を聞いて防空壕に入った当時を思い出す。戦争は二度と繰り返してはいけない」と話した。